炭

炭鉱〈暮らし・文化〉

炭鉱にはどんな暮らしがあったの？

明治時代の炭鉱は、集治監（刑務所）に入れられた人たちの労働力にたより、命を落とすほど、とても危険な仕事場でした。昭和初期には機械化も進み、全国各地から集まった多くの労働者が安全に働くことができるよう会社は安全対策をすすめ、快適な生活ができるよう住宅もつくりました。

◆炭住に暮らせば、家族のようなきずなが生まれた。

労働者のために会社が用意した住宅を「炭住」とよんでいました。長屋の炭住1棟は4～8戸に区切られていました。1970年代までは井戸、トイレ、風呂などは共同で、プライバシーはありませんでしたが、何でも気軽に相談できる、家族のような深いきずなが生まれました。

炭鉱住宅街

もっと知りたい！「炭鉱図鑑」

「石炭ストーブ」

石炭を燃やして部屋をあたためるストーブ。この上で料理をすることもあり、お湯をわかして部屋の乾燥を防いでいました。子どもたちは炭小屋から石炭を運んだり、ストーブに石炭を入れたり、燃えかす（アク）を捨てたり、親の仕事を手伝いながら、火のあつかいをおぼえました。

博物館に展示されている石炭ストーブ

三笠ではじまった「北海盆唄」

北海道の盆おどりでよく歌われる「北海盆唄」は、三笠の幾春別地区の盆おどり歌を札幌の民謡家が編曲したものです。いまも、「三笠北海盆おどり」は三笠で最も盛り上がる祭りとして、毎年8月14日、15日に中央公園で開催されています。北海盆唄のルーツの一つは小樽などに伝わる「高島越後踊り」といわれています。

いまの三笠北海盆おどりのようす

◆電気、水道代、家賃も無料だった？

最も深い危険な場所で石炭をほる人は、とても高い給料をもらっていました。電気、水道、家賃、大きな共同浴場も、ほとんど無料でした。炭住街には、食料品や日用雑貨が買える配給所があり、給料が書きこまれたカードを見せると、現金がなくても買い物ができました。

赤平の配給所

◆映画や演劇など札幌より早く公開された。

炭鉱で働く人や家族に娯楽を提供するため、炭鉱の会社は映画館や劇場をつくり、新作の映画や演劇なども札幌より先に上演されていました。

また、炭住街には子どもの数も多く、教室が足りなくなるほどでした。スポーツや芸術活動も盛んで文化的にも豊かな生活ができました。